生活者に対する OTC 薬適正使用の啓発講義とその効果

柴田由香里, 河内明夫, 富重恵利紗, 本屋敏郎*

九州保健福祉大学薬学部臨床薬学第一講座

Impact on General Public of Lecture on Proper Use of OTC Medicines Including TV Commercials and Case Studies

Yukari Shibata, Akio Kawachi, Erisa Tomishige and Toshiro Motoya*

*First Department of Clinical Pharmacy, School of Pharmaceutical Sciences,
Kyushu University of Health and Welfare*〔 Received January 19, 2009 〕
〔 Accepted August 6, 2009 〕

We have found that a lecture on over-the-counter (OTC) medicines including television commercials and case studies that we have been giving to freshmen pharmacy students has been useful in enhancing the professionalism of students as well as their motivation to learn about OTC medicines. In this study, we modified the lecture by adding audience-friendly figures and explanations, and gave it to members of the public to see whether it was effective in enhancing their awareness of the proper use of OTC medicines. It was given to 166 local residents and high-school students who were asked to complete a questionnaire before and after the lecture, and responses were analyzed for 133 people who fully completed the questionnaires.

Of the 133 respondents, 122 had used OTC medicines previously, and before the lecture, 46 of 65 local residents (70.8%) and 17 of 57 high-school students (29.8%) had considered a pharmacist's advice in selecting OTC medicines. Further, the number of respondents who desired a pharmacist's advice in selecting OTC medicines increased to 59 (90.8%) for the local residents and 54 (94.7%) for the high-school students after the lecture. While eight of 65 local residents (12.3%) and 11 of 57 high-school students (19.3%) had not read package inserts before using OTC medicines, after the lecture, all respondents said that package inserts should be read. The results showed that the lecture had increased people's interest in OTC medicines.

These findings suggest that the lecture was useful for increasing the general public's awareness of the importance of a pharmacist's advice on the proper use of OTC medicines.

Key words OTC medicine, general public, proper use, television commercial film, case conference

緒言

現在, 一般用医薬品(以下, OTC 薬と略す)の販売制度は大きな変革期にあり¹⁾, 新たに導入された OTC 薬のリスク分類に応じた情報提供義務は, セルフメディケーションをサポートするという薬局・薬店の機能^{2,3)}を高めることにつながると予想される。近年, 日本の医療を崩壊させる一因として軽症者の時間外受診の増加⁴⁻⁶⁾が問題視されている。医療制度を保守する一方策として, 薬局・薬店において軽症者を受け入れ, OTC 薬による治療が可能か, あるいは医師の診察が必要かを選別する機能を強化することは重要である。一方, 生活者における「セルフメディケーション」および「OTC 医薬品」という言葉の認知度はそれぞれ 56.2%, 23.9% とする報告⁷⁾

があり, 国民生活へ十分浸透しているとはいえない。すなわち, 薬局・薬店を活用したセルフメディケーションの積極的啓発活動を行い, 生活者自身による実践を促進することも必要と考えられる。

われわれはこれまで, 薬学生の学習意欲や職業意識を高めることを目的として, 薬学一年次生を対象に「テレビコマーシャルと症例検討を取り入れた OTC 薬に関する早期導入講義」を行ってきた⁸⁾。本講義は, 薬学生に対し薬剤師の職能と OTC 薬の適正使用の必要性を認識させる効果をもつことが確認されている。このことから, 一般生活者に対する本講義の応用は, セルフメディケーションにかかわる薬剤師の役割を認識してもらい, OTC 薬の適正使用を啓発する上で有用であると期待される。今回, 一般生活者向けに本講義を改変し, その有用性を検討したので報告する。

* 宮崎県延岡市吉野町 1714 1; 1714 1, Yoshino-machi, Nobeoka-shi, Miyazaki, 882 8508 Japan

方 法

1. 講義概要

講義は平成 20 年 8 月、地域住民を対象に開講した「公開講座」(宮崎県延岡市)、ならびに平成 20 年 9 月、高校 2 年生を対象に開講した「出張講義」(鹿児島県鹿児島市、志布志市)で実施した。講義は薬学生に対して行った早期導入講義の内容⁹⁾を基本として構成し、図 1 に示すスケジュールで行った。テレビコマーシャル(以下、TVCM と略す)の使用にあたっては事前に各製薬会社の許可を得、製薬会社がインターネットで配信している映像、もしくは製薬会社から直接提供を受けた映像を利用した。TVCM の解説は、生活者が対象であることを踏まえ、図や写真を多用し、平易な表現により講義が理解できるよう工夫した。また、TVCM の解説を発展させる際には OTC 薬の添付文書も活用した。講義の導入において TVCM の先駆的存在でその知名度が高く、配合成分が 2 成分のみである「パファリン A」(ライオン(株))の TVCM を活用し、OTC 薬に対する興味を引き出した。まず、TVCM のシナリオから片頭痛に対し「パファリン A」を使用できることがわかることを説明した。また、TVCM に使用されているフレーズから、有効成分のアセチルサリチル酸は胃酸中で溶けにくく胃粘膜障害を起こしやすいため、ダイバッファ HT を配合することで早く溶ける工夫がなされていることを解説した。次に、「ドリエル[®]」と「エスタック[®]NT 錠」(ともにエスエス製薬(株))を用い、OTC 薬の併用には注意が必要であることを認識してもらった。まず、「ドリエル[®]」と「エスタック[®]NT 錠」は効能・効果は異なるものの、有効成分として同じジフェンヒドラミンを含有している

ことを示し、薬の作用は使用目的によって効果にも副作用にもなることを説明した。さらに、ジフェンヒドラミンを含有する製剤としてアレルギー用薬である「レスタミン U コーワ錠」(興和新薬(株))、および乗り物酔い防止薬である「トラベルミン[®]」(エーザイ(株))も提示し、異なる使用目的で OTC 薬を併用する場合であっても成分の重複に注意が必要であることを解説した。次に、CM の内容から鼻症状に対する作用が印象付けられる「コンタック[®]600 プラス」(グラクソ・スミスクライン(株))および「ベンザ[®]ブロック S」(武田薬品工業(株))を使用し、適切な OTC 薬の選択方法について認識してもらった。まず、「コンタック[®]600 プラス」は鼻症状のみに有効である一方「ベンザ[®]ブロック S」は鼻症状の他に熱、のど等に有効な成分も含有していることを示し、適切な OTC 薬を選択するためには各製剤に含まれる有効成分を比較検討する必要があることを説明した。TVCM の解説終了後、セルフメディケーションを行うにあたり薬剤師のアドバイスを受けることが有用であると認識してもらうことを目的に症例検討を行った。まず、自己判断のみで OTC 薬を選択する難しさを体験してもらうため、提示したかぜ症状に最適と思われる OTC 薬を「パファリン A」、「ドリエル[®]」、「コンタック[®]600 プラス」、「ベンザ[®]ブロック S」の中から選択して挙手してもらい、選択した製剤の適否について薬剤師の視点から解説した。さらに、40 歳くらいの男性が「かぜ薬とドリンク剤がほしい。かぜだと思うけれど、なかなか治らない。昨日ぐらいからいつもと違う感じがする。体全体がだるい。心臓もドキドキする。熱はそんなに高くない。」とする一見かぜ症状にみえるが OTC 薬では治療できない心筋症の症例⁹⁾も提示し、OTC 薬を購入する際に薬剤師のアドバイスを受けることは、医療機関を受診する必要性の有無を判断する上でも重要であることを説明した。また、適切な OTC 薬を選択するだけでなく、適切な方法で服用する必要性についても認識してもらうため、PTP シートによる食道潰瘍を写真により示し、添付文書の「用法・用量」と「関連する注意」を厳守する必要性について説明した。

2. アンケート調査

講義による受講者の意識変化を調べることを目的に、講義前後にアンケート調査を実施した。講義前アンケートでは、受講者の「性別」、「年齢」の他、「OTC 薬の使用経験」と「使用した OTC 薬の種類」(複数回答)、「薬剤師への相談を希望したか、および実際に相談したか」、「OTC 薬購入時に何を参考にしたか」(複数回答)、「添付文書に目を通したか」、「OTC 薬に対する興味の有無」などについて調査した。講義後アンケートでは、講義前アンケートと同項目である「OTC 薬購入時に何を参考にしたいか」(複数回答)、「添付文書に目を通したいか」、「OTC 薬に対する興味の有無」などに加え、「講義

図 1. 講義スケジュール

満足度」についても調査した．なお講義前後とも，OTC薬の購入に際し薬剤師に相談したいと思った回答者に対し，どのような場合に相談したいと思ったかについて自由記載にて記入を求めた．

3. アンケート結果解析

アンケート対象者 161 名(公開講座 96 名，出張講義 65 名)のうち記入方法に不備のあった 28 名を除く 133 名(公開講座 71 名，出張講義 62 名)を対象に結果を解析した．統計解析には SPSS 16.0 J(エス・ピー・エス・エス(株))を使用した．「OTC 薬の使用経験」，「薬剤師への相談を希望したか」および「添付文書に目を通した(目を通したい)か」についての受講者間の比較にはカイ 2 乗検定，「添付文書に目を通した(目を通したい)か」についての講義前後の比較には McNemar 検定，「OTC 薬に対する興味の有無」についての受講者間および講義前後の比較には一般線形モデルの反復測定分析，「講義満足度」の受講者間の比較には Mann-Whitney 検定を用い， $p < 0.05$ を有意差ありと判定した．

結 果

受講者の年齢および性別の内訳を表 1 に示す．OTC 薬を使用した経験がある受講者は 91.7%(122 名/133 名)であった．その内訳は，公開講座で 91.5%(65 名/71 名)，出張講義で 91.9%(57 名/62 名)であり，有意差はなかった．OTC 薬を使用した経験がある 122 名の中で最も使用経験が多い OTC 薬はかぜ薬(97 名)であり，目薬(92 名)，かゆみ止め(63 名)が続いた(表 2)．OTC 薬を購入する際に薬剤師に相談したいと考えたことがあるのは公開講座で 78.5%(51 名/65 名)，出張講義で 47.4%(27 名/57 名)であり，「公開講座」の方が有意に多かった($p < 0.001$) (図 2)．薬剤師への相談を希望した受講者のうち実際に相談したのは，「公開講座」で 47 名，「出張講義」で 21 名であった．

表 1．年齢・性別構成

年齢	公開講座		出張講義		合計
	男性	女性	男性	女性	
19 歳以下	0	0	20	39	59
20 歳代	0	2	1	0	3
30 歳代	1	0	1	0	2
40 歳代	1	3	0	1	5
50 歳代	4	14	0	0	18
60 歳代	16	14	0	0	30
70 歳代	10	5	0	0	15
80 歳代	0	1	0	0	1
合計	32	39	22	40	133

表 2．使用経験のある OTC 薬

薬効分類	人数	%
かぜ薬	97	79.5%
目薬	92	75.4%
かゆみ止め	63	51.6%
湿布	62	50.8%
胃薬	55	45.1%
乗物酔防止薬	46	37.7%
解熱鎮痛薬	44	36.1%
咳止め	40	32.8%
消毒薬	40	32.8%
うがい薬	38	31.1%
ビタミン剤	30	24.6%
鼻炎用内服薬	19	15.6%
口内炎用薬	19	15.6%
下痢止め	18	14.8%
漢方製剤	15	12.3%
鼻炎用点鼻薬	13	10.7%
下剤	11	9.0%
みずむし用薬	11	9.0%
アレルギー用薬	8	6.6%
眠気防止薬	6	4.9%
貧血用薬	4	3.3%
点耳薬	1	0.8%
禁煙補助剤	0	0.0%
その他	3	2.5%

OTC 薬の使用経験がある 122 名に対し調査，複数回答

OTC 薬の使用経験がある 122 名に対し購入時に参考にしたものを尋ねたところ，「公開講座」では薬剤師のアドバイスを挙げた受講者が 70.8%(46 名/65 名)と最も多かった．一方，「出張講義」では薬の外箱を挙げた受講者が 56.1%(32 名/57 名)と最も多く，薬剤師のアドバイスを挙げた受講者は 29.8%(17 名/57 名)であった(図 3)．なお，図には示していないが，自らの希望で薬剤師からアドバイスを受け，それを参考に購入した受講者は「公開講座」で 42 名，「出張講義」で 16 名であり，自ら相談したわけではないが薬剤師にアドバイスされ，それを参考に購入した受講者は「公開講座」で 4 名，「出張講義」で 1 名であった．講義後は，薬剤師のアドバイスを参考にしたいと回答した受講者は公開講座で 90.8%(59 名/65 名)，出張講義で 94.7%(54 名/57 名)と大幅に増加した(図 3)．どのような時に薬剤師に相談したいかに関する自由記載では，公開講座，出張講義とも，自分の症状に最も合った薬を選びたいとき，どの薬を選べば良いかわからないとき，との記載が最も多く，病院へ行

図2. 薬剤師への相談を希望した経験(A: 公開講座, B: 出張講義)

OTC薬の使用経験がある122名(公開講座65名, 出張講義57名)に対し調査

図3. OTC薬購入時の判断材料(A: 公開講座, B: 出張講義)

OTC薬の使用経験がある122名(公開講座65名,
出張講義57名)に対し調査, 複数回答

くほどではないとき、病院へ行くべきかどうか迷うとき、などの記載もみられた。講義前、OTC薬を使用する際に添付文書に目を通していた受講者は公開講座で87.7%(57名/65名)、出張講義で80.7%(46名/57名)であり、両受講者間に有意差はなかった(図4)。講義後は全員が添付文書に目を通したいと回答した。OTC薬に対し興味がある、あるいは少しあると回答した受講者は、講義前は公開講座で64.8%(46名/71名)、出張講義で71.0%(44名/62名)であり、両受講者間に有意差はなかった。講義後、OTC薬に対し興味がある、あるいは少しあると回答した受講者は公開講座で87.3%(62名/71名)、出張講義で100%(62名/62名)と講義前に比して有意に増加し($p < 0.001$)、増加の程度は「出張講義」のほうが有意に高かった($p < 0.01$)(図5)。本講義に対し満足、あるいはやや満足と回答した受講者は公開講座で97.2%(69名/71名)、出張講義で100%(62名/62名)であった(図6)。

男女間において受講前後の意識に差がみられるか否か検討したところ、講義前の時点でOTC薬使用時に添付文書を確認したと回答した人は男性で74.0%(37名/50名)、女性で91.7%(66名/72名)であり女性のほうが有意に多かった($p < 0.01$)ものの、その他の項目については講義前後とも男女間に有意差は認められなかった。

考 察

OTC薬の広告は、他の商品の広告と異なり国民の保健衛生上きわめて影響が大きいため、広告の適正化を図る目的で「薬事法」、「医薬品等適性広告基準」、「一般用医薬品等の広告自主申し合わせ」などにより規制を受けている⁷⁾。すなわち、OTC薬の広告は信頼に値し、生活者がOTC薬を理解する上で有用な教材としてみることができる。今回実施した講義では、OTC薬の広告の中で最も目にする機会が多く生活者にとって身近であると考えられるTVCMを講義で取り上げ、各話題のイントロダクションとして利用した。また、講義後半の症例検討で取り上げたかぜ症状についても、表2に示すとおり、解析対象者の72.9%がかぜ薬の使用経験者であったことから、受講者にとって身近な題材であったと考えられる。

講義前、OTC薬の購入に際し薬剤師に相談したいと思った経験がある人は全体で63.9%であった。講義後には、両講義受講者ともに90%以上が薬剤師のアドバイスを参考にOTC薬を購入したいと考えるようになった。相談したいと思ったのはどのような時か自由記載で尋ねたところ、“自分の症状に最も合った薬を選びたいとき”、“どの薬を選べば良いかわからないとき”という意見が最も多く挙げられた。自由記載ではこの他、薬を

図4. OTC薬使用時の添付文書の確認(A: 公開講座, B: 出張講義)

OTC薬の使用経験がある122名(公開講座65名、出張講義57名)に対し調査

図5. OTC薬に対する興味(A: 公開講座, B: 出張講義)

図6. 講義満足度(A: 公開講座, B: 出張講義)

用いる時は情報を確かめてから用いる必要があること、
OTC薬も結構役に立つこと、OTC薬で対処すべきか病

院へ行くべきかも薬局で相談できることなどがわかったので、そのような場合に薬剤師に相談したいとの記載もみられた。また、普段見ているTVCMに今回の講義のような見方があることを知り驚いた、との感想もあった。すなわち受講者は本講義を通して、OTC薬を用いる時、その情報を確かめ症状に合った適切な薬剤を用いることの大切さを認識し、TVCMという身近な題材についてそれまで思ってもみなかったような薬剤師という視点からのその解説を聞くことによって、OTC薬を適正に用いるための相談者として薬剤師の存在の認識を高めることになったものと考えられた。これらのことから、本講義は、背景如何にかかわらず、薬剤師を活用したOTC薬の選択の必要性を認識させる上で有効であったと考えられた。

「公開講座」と「出張講義」の結果を比較すると、「公開講座」のほうが薬剤師に相談したいと考えたり、実際に薬剤師のアドバイスを参考にOTC薬を購入した経験を持つ受講者が多かった。OTC薬の需要は年齢が上がるほど増加するとの報告¹⁰⁾や、薬局・薬店の利用者の年齢分布は40～60歳代以上が大半を占めるとする報告¹¹⁾があることから、50～70歳代が中心の「公開講座」の受講者のほうがOTC薬を使用する機会がより多く、薬剤師への相談を必要とする機会も多かったものと推測された。一方、「出張講義」の受講者の半数以上はOTC薬を選択する上で薬剤師に相談する必要性を感じておら

ず、薬の外箱を参考に OTC 薬を購入していた。しかし出張講義では、講義後、薬剤師のアドバイスを求めて購入したいと考える受講者の増加が公開講座よりも顕著であった。このことから、高校生に対しては薬剤師を活用することの有用性を、より力を入れて啓発していく必要があり、啓発講義を行えばその効果は一般成人よりも期待できると考えられた。

本講義において、TVCM の内容から OTC 薬の適正使用に関する話題へ発展させる際には OTC 薬の添付文書を活用した。OTC 薬の添付文書は、OTC 薬の適正な使用と安全性の確保を図るためのものであり、一般生活者にとって見やすく、わかりやすいよう配慮して作成されている¹²⁾。添付文書を活用することは、OTC 薬の適正使用を促す上で非常に重要であると考えられる。講義前、男性より女性のほうが添付文書に目を通す割合が有意に高かった。家庭を持つ女性は、自身が使用する OTC 薬以外に家族が使用する OTC 薬を購入する機会も多いと考えられ、適正使用に対する意識が高いものと推察された。講義後は、受講者全員が添付文書に目を通すと回答したことから、OTC 薬の適正使用の必要性を認識する上でも本講義は有用であったことが確認された。

講義により OTC 薬に対する興味は有意に増加し、その増加の程度は薬剤選択における薬剤師への相談希望と同様「出張講義」のほうが「公開講座」よりも有意に高かった。すなわち、本講義は若い世代に対しより効果的に OTC 薬に対する興味を増加させた。高校生は OTC 薬の使用経験がまだ少ない分、本講義の啓発効果がより強く表れたものと推測される。

本講義の満足度は高く、幅広い背景をもつ一般生活者にセルフメディケーションにかかわる薬剤師の役割を認識してもらい、OTC 薬の適正使用を啓発する上で有効であったと考えられる。本講義は日頃の薬局薬剤師との情報交換から得られた生活者の興味や視点も考慮し、その内容を構築した。そこで本啓発講義が薬局薬剤師の視点からはどのように評価されるかについて、近隣薬局薬剤師の意見を求めた。その結果、このような講義により生活者に「薬剤師に相談したい」という意識が広がるのはありがたく、より適切な薬剤の提案がやりやすくなる、生活者の OTC 薬に対する興味が増えることにより保険薬局での説明もやりやすくなる、薬剤師の仕事を理解してもらうことになる、などの意見が寄せられ、本講義の実施は薬局薬剤師にとっても有益との評価であった。また、これらの結果を薬局薬剤師のセルフメディケーションサポート活動の中で生かすことができるかどうか尋ねたところ、より積極的に薬剤の違いについて説明するようにしたいと思う、特に高校生への講義において薬剤師に相談したいとする認識の増加や OTC 薬への興味の増加がみられているため、学校薬剤師活動での薬

教育に力を注ぐようにしたい、などの意見が聞かれた。これらの意見を参考に、本講義による啓発活動をさらに継続し、それに対する薬局薬剤師の評価やセルフメディケーションに対する薬局薬剤師の意識への影響について今後詳細に検討しながら、より一層効果的な啓発方法を模索していきたい。

謝辞 本研究の一部は、財団法人 一般用医薬品セルフメディケーション振興財団による研究助成を受けて行った。

本研究の趣旨をご理解いただき、講義における TVCM 使用を快諾していただきました各製薬企業に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 日薬情報(No.192)新たな一般用医薬品販売制度の施行に向けて、日本薬剤師会雑誌, **60**, 867-874 (2008).
- 2) 半谷眞七子, 柴田章代, 亀井浩行, 松葉和久, 浅井雅浩, 谷山正好, OTC 薬の必要性を選別するための薬剤師のコミュニケーションの分析, 医療薬学, **33**, 693-701 (2007).
- 3) 半谷眞七子, 安間保恵, 亀井浩行, 松葉和久, 浅井雅浩, 谷山正好, 阿部恵子, OTC 薬選別時における患者と薬剤師間の RIAS によるコミュニケーション分析, 医療薬学, **34**, 1059-1067 (2008).
- 4) 小林久美子, 窪田正幸, 八木実, 奥山直樹, 大滝雅博, 山崎哲, 村田大樹, 平山裕, 佐藤佳奈子, 小児外科医による深夜帯小児救急外来患者の現状分析: Niigata study, 日本小児外科学会雑誌, **43**, 678-682 (2007).
- 5) 高柳俊作, 坂本真幸, 山下安佐美, 中村巧, 上條貢司, 斉藤達也, 谷口民樹, 張漢秀, 松居徹, 脳神経外科救急外来の現状と問題点 埼玉医大総合医療センターの場合, *Neurosurgical Emergency*, **13**, 21-26 (2008).
- 6) 佐々木誠, 茨木信博, 自治医科大学眼科における時間外救急診療の統計的観察, 臨床眼科, **62**, 1505-1510 (2008).
- 7) OTC 薬協, 消費者意識調査報告書をまとめる, 日本薬剤師会雑誌, **60**, 1483 (2008).
- 8) 柴田由香里, 河内明夫, 本屋敏郎, テレビコマーシャルと症例検討を取り入れた OTC 薬に関する薬学 1 年次早期導入講義の効果, 医療薬学, **35**, 64-69 (2009).
- 9) 堀美智子監修, 福生吉裕(臨床)監修, “OTC 薬ガイドブック”, 医薬情報研究所/株式会社エス・アイ・シー, じほう, 2007, p. 11.
- 10) 大日康史, 井伊雅子, 疾病毎の医療受診と OTC 需要の代替性に関する分析, 季刊社会保障研究, **38**, 157-165 (2002).
- 11) 和田光弘, 池田理恵, 宮崎長一郎, 中村博, 中島憲一郎, OTC 薬取り扱いのある地域薬局(店)における OTC 薬の購入とセルフメディケーションに対する患者意識の調査研究, 日本薬剤師会雑誌, **60**, 1759-1765 (2008).
- 12) 厚生省医薬安全局長, 一般用医薬品の添付文書記載要領について, 医薬発第 984 号(1999 年 8 月 12 日)。